

令和6年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育の概況	成熟期は、平年並からやや早まる見込み。出穂期以降高温と降雨が繰り返されたため、倒伏が多く、赤かび病が平年より多く見られる。現在の作柄は「平年並からやや良」が見込まれる。
作業の進捗状況	排水対策、収穫準備、適期収穫

1 気象経過 (前橋橋地方気象台データの平年比、※5月は20日まで、参考資料参照)

項目	11月	12月	1月	2月	3月	4月	※5月
平均気温	+1.3℃	+1.7℃	+1.9℃	+2.0℃	±0.0℃	+3.2℃	+0.7℃
降水量	79%	59%	96%	238%	177%	98%	162%
日照時間	115%	110%	108%	92%	104%	87%	112%

2 生育概況

(1) 概要

初期生育は順調で、播種が早かったほ場を中心に草丈、茎数は平年を上回り、麦踏みの開始時期も早まった。12月下旬から1月中旬で乾燥傾向となったため、大麦の一部で下葉の黄化・葉先の枯れが見られたが、1月下旬から2月上旬の降雨により回復した。2月は気温が著しく高く推移し、平年より生育が大幅に早まったが、3月は一転して低温傾向が続き生育が緩慢となり、出穂期は小麦、二条大麦、六条大麦ともに平年並から2日早まる程度となった。成熟期は標高が高い地域を中心に一部遅れそうであるが、各麦種とも平年並から3日程度早くなる見込み。

稈長が長い傾向であり、3月下旬から4月中旬にかけてや5月以降降水量が多く、二条大麦や畑麦を中心に部分倒伏や全面倒伏しているほ場が増えている。また、穂数、穂重は多い傾向だが、二段穂となっているほ場も散見されており、屑麦が多くなる懸念される。

小麦では、出穂期以降の高温とまとまった雨により、赤かび病が県域全体で平年より多く発生しているが、発生程度は微～少程度となっている。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

雑草の発生が多い(イタリアンライグラス、カラスノエンドウ、コアカザ等)。

病害は、県域全体で赤かび病が微～少発生。一部地域の畑麦でなまぐさ黒穂病が発生している。

(3) 作況ほ等の調査結果

作況ほ(さとのそら)のデータの平均は、播種期は11月23日(過去平均比+2日)、出穂期は4月17日(同±0日)、稈長は81.6cm(同107%)、穂長は8.8cm(同105%)、穂数は724本/m²(同108%)となっている。

農業技術センターの生育基本調査結果(小麦「さとのそら」、11月15日播種)では、4月10日現在、草丈が63.6cm(過去10カ年平均比108%)、茎数が660本/m²(同93%)であり、出穂期は4月16日(同-5日)となっている。

(4) 作柄のまとめ

小麦の作柄は中部、伊勢崎で「並～やや良」、他地区で「並」であることから、県内の平均作柄は「並～やや良」が見込まれる。

表1 小麦作況ほ調査結果（さとのそら）

地 区	播種期 月日	出穂期 月日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	穂重 g/m ²
平 均	11/23(+2日)	4/17(±0日)	81.6(107)	8.8(105)	724(108)	563(115)
前橋市	11/22(-)	4/16(-)	82.7(-)	9.4(-)	713(-)	725(-)
伊勢崎市	11/23(+1日)	4/15(±0日)	79.8(111)	8.3(102)	731(134)	591(137)
高崎市	11/23(+8日)	4/17(+3日)	79.0(111)	8.7(109)	646(104)	557(134)
太田市	11/30(+1日)	4/19(-2日)	81.4(107)	9.1(113)	482(79)	458(94)
千代田町	11/19(±0日)	4/17(-1日)	86.3(101)	9.1(97)	1,037(113)	646(104)

*各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

*日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

過去の平均値は、前橋市はほ場変更により過去値なし、伊勢崎市は過去2年、高崎市は同4年、太田市は同10年、千代田町は同2年の値。前橋市は県平均から除外した。

表2 普及指導課・地区農業指導センター管内の麦類の作柄概況

地 区	県平均	中 部	伊勢崎	西 部	東 部	館 林
作柄概況	並～やや良	並～やや良	並～やや良	並	並	並

3 技術対策

(1) 収穫準備・適正収穫

- ア 収穫までの降雨に備え、排水不良のほ場では、排水溝の確認や手直しを行う。
- イ 収穫物に雑草種子や異種穀粒などが混入しないよう対策（抜き取る等）を行う。
- ウ 機械類の清掃を徹底し、収穫物への異物混入を防止する。
- エ 荷受け施設においては、麦の生育状況に合わせた稼働計画を設定する。
- オ 著しい生育むらによる未熟粒の多発・倒伏・穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病の有無を確認し、これらの発生が認められた場合は別収穫とし、乾燥調製施設への搬入は行わない。
- カ 収穫適期の目安は、穀粒水分が25%以下になった時を基準とする。穂首の曲がり状態で判断すると、二条大麦が90%以上、小麦・六条大麦が50%以上の時である。ただし、遅発穂が見られる場合は収穫を数日遅らせる。
- キ 二条大麦は穀皮が薄く損傷粒が発生しやすいので、コンバインのこぎ胴回転数の設定に留意する。
- ク 成熟期後に長雨が予想される場合、穂発芽を避けるため収穫可能な状態となったら、できる限り速やかに収穫作業を行う。

(2) 乾燥・調製

- ア 収穫した穀類をそのまま長期間放置すると発熱により品質が低下するため、収穫作業は乾燥能力に見合った量とし、計画的に実施する。やむをえず高水分麦を収穫した場合は、速やかに乾燥を行う。
- イ 乾燥調製施設では、穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病等の被害粒やカラスノエンドウ等の雑草種子が混入しないよう荷受時の確認を徹底する。
- ウ 枯れ熟れ等の影響により細粒・未熟粒・硬質粒の発生が懸念されることから調製時は流量等に留意するとともに、必要に応じて色彩選別機等を活用して丁寧に調製する。フルイ目はビール大麦が2.5mm、六条大麦（食用）と小麦が2.0mmを基準とし、必要に応じてフルイ目の調整を行う。整粒歩合は小麦80%以上、ビール大麦90%以上、乾燥仕上がり水分は小麦が12.5%以下、ビール大麦・六条大麦が13%以下とする。

(3) 災害対策等

降ひょうにより麦が脱粒したり、その他の災害等によりやむを得ずすき込む場合など、麦種実がほ場に投入される場合は後作の施肥量の調整を行う。後作が水稻の場合は、脱粒子実が300kg/10a程度では基肥窒素を1～2割減肥し、400kg/10a以上では2kg/10a程度にとどめる。さらに、土壌の強還元化を防止す

るため、間断かん水や中干し等の水管理を十分に行う。

(4) 麦わら処理

麦わらは有効な資源である。焼却は避け、すき込むなど適正に処理する。

【参考資料】

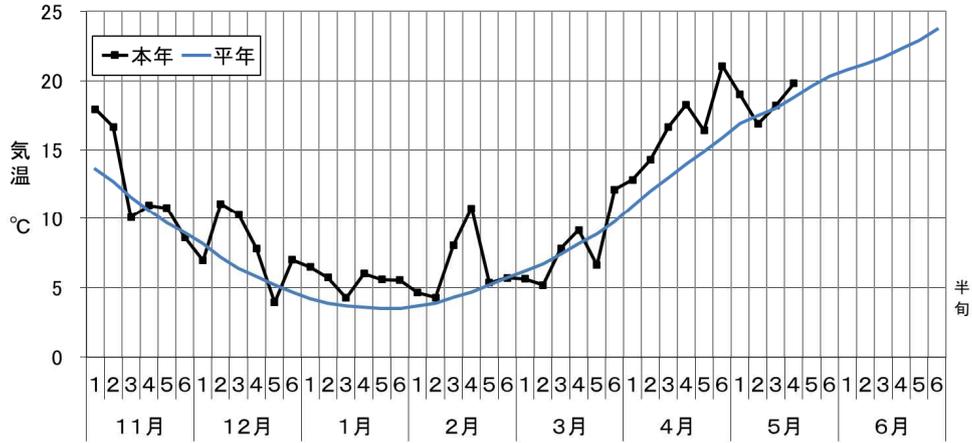


図1 麦作期間の気温（前橋地方気象台）

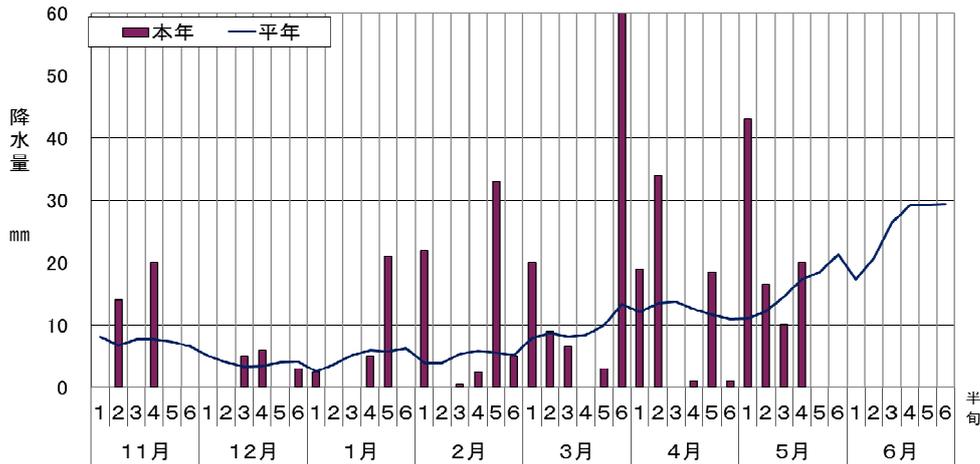


図2 麦作期間の降水量（前橋地方気象台）

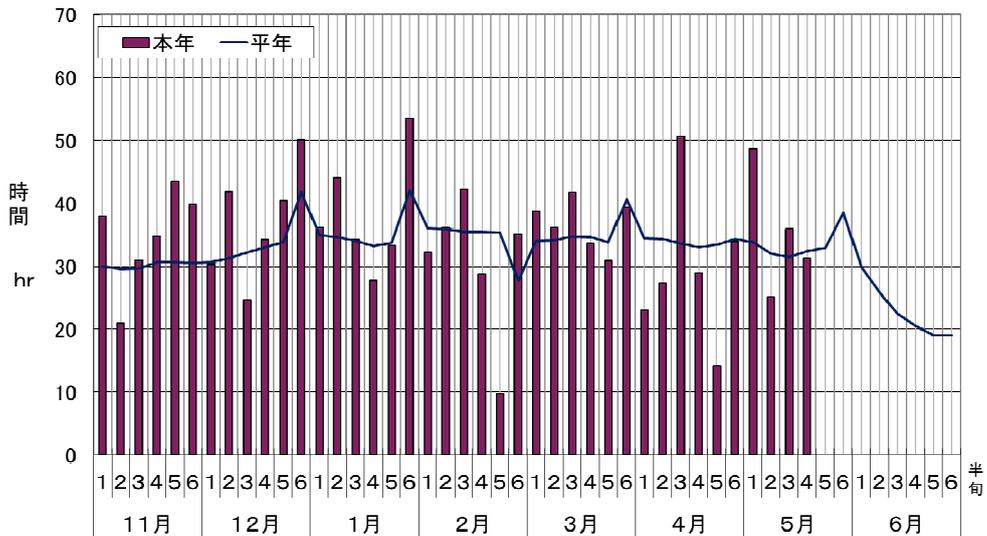


図3 麦作期間の日照時間（前橋地方気象台）